

暖かい……というのが最初に感じたことだった。健康的な色の肌、筋肉質な弾力に包まれるの目覚め。そして数回の瞬きの後、蒲生の屋敷に越してきたことを思い出す。

「……あ……」

包まれているだけではなかった。幹人も甘えるように蒲生の背中に腕を回していた。

「おはよう」

「……すみません、僕寝坊……？」

幹人の声は掠れているのに、蒲生の声はしゃんとしていた。恐らくだいぶ前から起きていたのだろう。

「いや、もう少し寝ていていい」

蒲生の言葉を聞きながら、感じたのは尿意だった。でも昨日のことを思い出すと軽々しく言葉にすることはできなくて、意識を逸らすために関係のないことを話す。

「いえ、誠司さんはもう起きるんですよね」

「そうだな。だがミキはもう少し——」

「いえ、僕も起きます」

手の代わりに、蒲生の胸に顔を押し付けて脛を擦る。それがくすぐったかったのか、それとも年齢に似つかわしくない甘えた仕草がおかしかったのか、蒲生が小刻みに身体を揺らした。

「……すまない」

恐らく後者だろうな、と思っていた空気が伝わったのだろう。そしてそれは正解で、蒲生が笑いながらの謝罪を述べる。

「可愛くて、つい」

「いえ……すみません……」

ふて腐れたふり。でもそれだって蒲生は可愛いと言ってくれると分かった上で、自分でもずるいと思いつながら。

「可愛い、ミキ。拗ねないでくれ」

「拗ねてないです」

拗ねてないのは本当だ。ふり(・)だから。でももう少し甘えたくてぎゅうと抱きつくど、蒲生はまた身体を揺らしながら、それでもゆったりと、髪を梳くように頭を撫でてくれた。

「ミキ、オムツは濡れてるか」

あまりの心地よさに落ちかけていた目蓋がパチッと開いた。まるで冷水を浴びたように意識も覚醒する。

「っ！ ……や、濡れてないですっ」

「出ないのか」

そんなことあるはずがないだろう。だって今まで、少なくとも覚えている限りおねしよをしたことなんて一度もないのだ。なのにそれを急に、オムツをされたからといってするようになるはずがない。

「ないです！」

「なら、尿意があるだろう」

そう言うと、蒲生は幹人の返事も待たずに身体を捻ってヘッドボードのボタンを押した。でも何も言わず、こちらに向き直り腕の中に囲われる。

「ほら、おいで」

もう身体は腕の中。だから、言葉通りの意味ではない。頭をぐっと引き寄せられると、唇が触れる距離にあるのは小さな乳首。

きつとすぐに誰かが入ってくるのだろう。そう思うとやはりどうしても恥ずかしくて。先程と同じように甘えたいけれどドアが気になってしまう。

(うう……)

昨夜はまだ、もう少し平気だったように思う。というか、人前でセックスまでしてしまっただのだ。そんなこと、平常心ではとてもじゃないができない。だからきつと昨夜はおかしかった。普段のセックスとはまた違う興奮をしていたのだと思う。でも眠ったせいかもしれない。羞恥心が戻ってしまったている。それでもまだ羞恥を感じるというだけで、昨日感じたほどの戸惑いは——ない。

「シキ」

「……はい」

トントン、とドアをノックする音が響いた。挨拶は顔を見ながら——それが礼儀だけれどどうしても耐えられそうになくて。促されるままぎゅつと縋るように抱きついて乳首を口も含むと、ぱさりと布団が頭の上まで掛けられた。

(隠してくれた……?)

とはいえ、足先は空気に触れている。でも顔を見られないだけマシかもしれない。

「失礼します」

二人分の声。昨夜、蒲生は大樹と香澄に「明日はゆっくりでいい」と言っていたので、やはり違う人だ。

(誰だろう——)

少なくとも奉(とも)と仕(まなぶ)ではないようだ。

「おはようございます」

「ああ、おはよう」

蒲生の左腕が布団越しに頭を優しく撫でてくれる。

「オムツを」

「かしこまりました。奥様、失礼いたします」

(あつ……)

ピク、と揺れた身体は、蒲生が守るように抱きしめてくれた。

「大丈夫、ミキ」

「ん……」

ちゆう、と口内の乳首を吸う。乳頭はまだ柔らかい。早く硬くなってほしいけれど、どうしても意識が下半身に向いてしまつて乳首に集中することができない。

微かにオムツをひっぱられるような感覚の後、ペリというテープを剥がす音が聞こえた。そして暖かい空気に包まれていた陰部が爽やかな朝の空気に触れて震える。

「旦那様、奥様に深夜の排泄はごいませんでした」

「ああ。まだオムツに排泄は難しいんだろう」

庇うような声。でもそんなこと、本来ならできるようになる必要もないはずのこと。

(でもここでは——)

「では朝一番の排尿でございます。奥様、失礼いたします」

まさか……とは思つたけれど、もう「信じられない」とまでは思わなかった。だって昨日、何度も経験したことだ。

昨夜だけで二度も射精し、寝起きでも勃起する元気のなかったペニスをつままれる。

(あ……)

そしてその先端を温かいものが優しく包んだ。

(あ、あ……気持ちいい……)

ペニスを包まれる快感。これはやはり、もう二度と忘れることはできないだろう。むしろいつかしてもらえなくなったら「してほしい」とさえ思ってしまうようなほどの。

「……ミキ。いいよ出して」

(……ああ……)

本当にこれからずっとこんな生活をしていくのだろうか。蒲生はトイレを使うのだから、幹人だつて使つてもいいはずなのに。

——でも、拒否できなかつた。これが気持ちいいことだと、もう脳は覚えてしまっている。

(あ……ああ……)

寝起きはどうしても尿意が強い。でも、頭では受け入れてもやはりすんなりと人の口内に排尿するなんてことはできなくて。出したいのに、貸すかに残つた理性が邪魔をする。

「ミキ、ゆつくりでいい」

優しい声。そういえば蒲生も今、一緒に入ってきたメスマイドの口に排尿しているのだろうか。

(気になる……)

でも、昨日感じたほどの嫉妬はなかった。やはりペニスには触れないでほしいと思うものの、蒲生の感情がそちらに向いているとは思わなかつたから。だから浮気だとかそういう感情は全くなくて。でもどうしても、恋人以外に性器を預けるのを当たり前とする感覚を理解することはまだできそうにない。

「……誠司さん」

「ん？」

まだ顔は布団の中。優しい感触の布団カバーと蒲生の肌に含まれながら、顎を上げ、見えない蒲生の方を向く。

「誠司さんも……おしっこ……？」

恐る恐るした質問。けれど蒲生はふっ、と体内から空気を抜くように笑った。

「ミキがぐつぐつと寝ていたから、私はその間にトイレに行ったよ」

それはつまり、今ベニスを啜えられているのは幹人だけ、ということだ。寝室にいるのは計四人。そのうち、幹人だけが下半身を曝して、残る三人はそこから尿が出されるのをじっと見守っているような状態。

そう考えたらずわ、とした。寒気もないのに鳥肌が立つ。

(ああ……)

だって、そんな……排尿を待たれているなんて。トイレからの戻りを待たれているのとは全く違うこの状況。

「ミキ」

「あ……誠司さん……」

ぐつと頭を引き寄せられ、乳首を啜えていなかったことに気付いた。寄せられるがまま、男らしい小さな乳首をもう一度口に含む。

「んっ……」

「リラックスして」

「ん……」

目を閉じて、意識を蒲生の乳首に向ける。

(昨日はあんなに無理って思ったのに……僕、流されやすいのかな……)

「ミキ」

「あ……」

また意識が乳首から逸れていた。蒲生は敏く、顔を見ていなくても幹人の心境に敏感だった。だから電話でもいやらしい気分になればすぐに「脱いでごらん」と言われたし、会えなくて寂しい気持ちを押し殺しているときでもアパートの前に車を寄せて、ほんの数分でも顔を見せてくれた。

「……少し吸ってやってくれ。だが龟头は感じやすいので勃起はさせないように」

くくく

「では、本日のミーティングを始めます」

裸でいるのは恥ずかしい。でも座ってしまえば陰部の丸見えは回避できる。でも……やはりこんな大勢の中で自分一人裸というのは恥ずかしくて。俯けば陰部が目に入るし、かと言って室内やみんなの顔を見回すこともできなくて、膝の上で拳を握り、ぎゅつと目を閉じた。

(早く終わって……)

とりあえず執務室に入ってしまえばそこに来る人は限られる。結局はみんなに身体を見られることにはなるのだろうけれど、それでもいくらかはマシだ。

「ミキ、改めて紹介する。顔をあげなさい」

「あ……」

拳を包んだ大きな手。目を開ければ、蒲生の手と自分の陰部が目に入った。

(うう……)

でも蒲生の言葉を無視していつまでも俯いていることなんてできなくて、ゆっくりと顔を上げた。

「いいこだ。可愛いミキ。では各自自己紹介を」

蒲生の言葉につられ、つい全員を見回してしまった。けれどそこに、大樹と香澄の姿はなかった。知った顔がないのは少し不安だったけれど、きちんと休めているのだろうと思うとほっともした。大変な仕事だろうけれど、きっと蒲生はこうしてみんなに無理のないスケジュールで働かせているのだろう。

(優しいし、人を大切にできる人だし)

本当に素敵な人だと思う。いいところをたくさん知っているから、ここでの生活を考えても別れたいなんて思うことができない。

カタン、と椅子を引く音が聞こえた。

最初に挨拶したのは金田だった。それから康生が引き継ぎ、和紗が頭を下げる。それからオスメイドとメスメイドがペアごとに名前を告げ、頭を下げた。

「あ、の……幹人、です……宜しくお願いします」

本当は席を立つべきだろうと思ったけれど、やはり裸ではしたくなくて。失礼を詫びながら座ったままの挨拶。この場で幹人を咎められるのは蒲生だけなのだろうけれど、みんなの前で注意をしない蒲生の優しさに甘えた。

「生涯を誓った相手だ。まだ慣れないので戸惑うことも多いと思うが、サポートをしてほしい」

そういうところは以前と少しも変わらない。何かトラブルのようなことが起きても、蒲生は幹人の心情を第一に考えて先回りして動いてくれた。優しい人。蒲生の方を見れば視線に気付き、微笑みや頷きを返してくれた。その表情にほっとしていると、金田が先を進めた。

「本日大樹は午後からの仕事のため、引き継ぎに関しては私が代わりに行います。まず、昨日の奥様の排尿と排便、射精について」

「っ、え、や、なにっ」

一体何を言い始めたのだろう。焦るけれど、隣に座る蒲生も、それからテーブルについている使用人の誰ひとりも戸惑う様子を見せない。むしろ真剣なまなざしで金田を見て、ノートにペンを走らせている。

「自然排便はなし。大樹による浣腸で——」

まるで幹人がここにいないかのように進められる報告。しかも汚物についての話だという

のに誰一人嫌悪感を表すことなく、むしろ熱心に書き留めていく。
(うう……)

金田は消化の具合についてまで話している。きっとみんな便の形状や量の話、排泄時の幹人の様子まで金田が言った通りのことを記録に残しているのだろう。

恋人を丸裸にするような話をされているというのに、蒲生は今一体どんな顔をしているのだろう——気になったけれど、顔を上げることはできなかった。

(帰りたい……)

帰る場所などもない。だからせめて寝室のベッドに潜り込みたい。いやでもそれではきつと昨夜の行為を思い出してしまうので、どこかまだ足を踏み入っていないところ——クロ―ゼットや物置でもいい。どこか人目につかないところで膝を抱えて一人でじつと座っていたい。

「——排尿と排便については以上。続いて射精について。奥様は昨夜二回射精をされ、各射精前には大樹がカウパーを数回拭き清めたということなので、排尿時、特に尿道口の状態には気を付けること。もし炎症が見られるようなら啞える前に必ず医師に連絡をして状態の確認を待つこと」

「はい」

使用人たちの息の合った返事が室内に響く。

「なお、奥様は仮性包茎でいらつしやるので皮に隠れた部分に炎症が起きることがある。だが普段通り皮に守られていないと不安になられるので、皮を剥いて亀頭の状態を確認した後は必ず皮を戻してから啞えること」

「はい」

眩暈がした。もうやめてほしいと言いたかったけれど、言葉を発すれば確実に注目を浴びてしまう。幹人のことを説明されているというのに、誰一人幹人を見ずに金田を注視しているこの状況をどう捉えたら良いのかさえ、もう全く分からなかった。

「では、本日のスケジュールの確認に入ります」

どうやらミーティングを仕切るのは金田の役目らしい。大きなスケジュール帳とファイルを捲りながら発言を続ける。

「旦那様、本日のセックスは何時をご希望になられますか」

「っ！」

まさかそんなことがスケジュール確認に含まれているなんて想像もしていなかった。ごぼつとむせると蒲生が背中を撫でてくれる。

「大丈夫か、ミキ」

「ず、ずみませ……」

「申し訳ございません、奥様。しかしこれからは毎日確認をいたしますので」

ああもう……と思った。それ以上は、もう頭の中であつても言葉が出てこない。

「今夜は夕食の前だ。風呂もセックスの後に入る」

「承知いたしました」と、金田と使用人たちが一斉にメモを取った。

「本日旦那様のお仕事は十九時終了を予定しております。奥様がまだ洗淨に不慣れであることも考慮し、十八時には洗淨を開始いたします」

~~~~~

「失礼します」

大樹に呼ばれた康生と和紗はすぐに部屋にやってきました。二人とも、手には小さなポーチを持っている。

「まずは和紗から頼む」

「承知いたしました」

(え?)

まずは、とは一体どういうことなのだろう。一人部屋に案内してもらうだけではないのだろうか……と思っていると、大樹と康生がソファの前のテーブルを部屋の端に動かした。そしてその空いたスペースに、香澄と和紗が室内の棚から取り出した大きなマットを敷いている。

「え?」

一体何が始まるのだろうか、と思っていると、マットを敷き終えた和紗が突然ズボンを脱ぎ出した。

「え、え?」

一体何を……この状況を説明してくれる人を探すように室内を見回す。しかし誰もこちらを見てはいなかった。目の前に敷かれたマットの上では、下半身を露出させた和紗がこちらにお尻を向けて四つん這いになっていた。開かれたお尻の間、毛の一本もないそこに、濃いピンク色のアナルが見えている。

(わ……………!)

見てはいけないものを見てしまった気がして慌てて顔を背けると、その先にいた大樹が、コンドームを手はこちらに歩いてくるところだった。そこまで見てから「まさか」という思いに至った。でもパニックになったときの癖なのか、口からは勝手に「何」という言葉が飛び出してしまふ。

「あ……………え、や、何?」

「ミキ、オナホールだよ」

「え?」

左を向くと、蒲生がこちらに歩いてくるところだった。ゆったりとした足取りと口調は、まるで小さな子供に少し難しいことを話して聞かせるよう。

「オナニーだよ。このオナホールを使ってオナニーしなさい」

「や……………何言ってる……………オナホールって……………だって和紗さん……………」

しかし蒲生の視線の先にはやはり和紗だ。考えたくないけれど、アナルをこちらに向けていることから、その言葉の意味が「イコール」になっていることは間違いない。

「今はオナニーの時間だから、和紗だと思ふ必要はない。肉オナホだよ」

「肉オナホ……」

「左様でございます、奥様」

康生が和紗の隣に膝をつき、そっとアナルに触れた。そこはもう準備が済んでいるのか、とろりとした液体で濡れている。

「っ……」

自分のアナルを準備したことはある。けれど、当然それをこのように自分で目にしたことなどはあるはずもなく。

(こんな風になってるんだ……)

和紗のそこは綺麗だった。無駄毛もなく、色も鮮やか。そして粘着質な液体を纏い、まるで誘うようにてらてらと光り蠢いていた。

(いやらしい……)

じっくりと見つめていい場所ではない。なのに、目が離せなかった。もつと見ていたい。そしてその中がどうなっているのか——ゴクン、と喉が鳴った。血液が下腹部に集まっている。

「中はこのように」

まるでそんな幹人の気持ちを分かっているかのように、康生が指を二本挿し入れた。そして左右に開くと、ピンク色の内部が露わになる。

(ああ……すごい……)

眩暈がしそうなほどのいやらしさ。蒲生の色気と同じくらい興奮してしまう。

「奥様のペニスをこちらのオナホールが包み込みます」

「あ……あ……そんな……」

オナホールと言われたって、和紗のアナルだ。入れれば、それはすなわちセックスになってしまう。

——でも。

入れたい。あの柔らかかそうな肉壁に包まれてみたい。

当然和紗のアナルは自分のそことは具合が違うだろう。それでも、蒲生が「気持ちいいよ」と熱い息を零すようなアナルでの快感を知ってみたい。きっと生の肉は玩具では到底再現できないほどイイ(・・)のだろうし、これからも一生蒲生と離れるつもりのない今、男なら誰もが望むペニスでの快感への興味は消えない。

「ミキ、入れてごらん」

「誠司さん……」

ただネックなのは、これではセックスになってしまう、ということだ。肉壁という時点で相手は生きた人間であるのだからどうしたってセックスになってしまうと分かりながら——「肉壁に包まれたい」という気持ちと「セックスになってしまう」という気持ちがせめぎ合う。

「怖くない。ペニスを入れて、腰を振ればいい」



「や……だって、」

「介助がいるか？」

「え？」

「大樹」

「はい。奥様、失礼いたします」

蒲生がこちらに来たことで一度距離を置いていた大樹が再びこちらに近付いてきた。そして目の前に膝をつき、コンドームの封を切る。

「あ……」

「サイズは大丈夫か」

「はい。Sサイズをご用意しております」

「っ……や……」

Sサイズ——すでに全員に見られているのでサイズなんて今更なのだけれど、それでもこうして言葉にされると恥ずかしいような悔しいような。でも怒りは湧かないし、目をぎゅつと閉じると、みんなに小さなペニスを視姦されているような錯覚に陥り、興奮が増した。

大樹が先端をつまんだコンドームを亀頭にあてた。丸まったゴムを転がすようにして勃起に被せられていく。

「あ……あ……」

これは昨夜、蒲生が香澄にされていたことだ。勃起を差し出し、コンドームの装着をしてみよう。自分でできる簡単なことのはずなのに、恋人でもない第三者にしてみようというこの状況のあまりのいやらしさに眩暈がする。

「痛みはございませんか」

「はい……」

コンドームをつけたのは初めてだった。適度な圧迫感。痛みはないけれど、あまり心地よいものではない。慣れなのだろうけれど、どうしても落ち着かない。

「ミキ？」

「奥様？」

「あ……いえ……」

「ミキはまだ慣れないからな」

「……お外します」

「え」

蒲生の指示なんてなかったのに、大樹はペニスを押さえてまたくるくとコンドームを外してしまった。せつかくつけてくれたのに、と思うけれど、ペニスを包む不快感が消えたことに内心安堵の息を吐く。

「こちらはオナホールですので、直接中に出していただいても問題ございません」

「でもっ……」

「ミキ、ただのオナホールなんだよ。玩具だ。使いたいように使えばいい」

「……はい……」

きつと、蒲生も周りの人たちもみんなそのように思っているのだ。今のこれは和紗のアナルではなくただの玩具だと。だからこうして、他人とのセックスを勧めてくる。

(誠司さんまで……)

いや、むしろ蒲生がそう言うからこそみんなも同じように言うのだろう。

「……誠司さん」

「ん？」

「僕が……」

「うん？」

「いえ……」

——誠司さんは僕が和紗さんとセックスをしてもいいの？ と訊きたかった。けれど訊いたところで意味はない。だって蒲生は本当に和紗のことをオナホールだと思っているのだ。それに、他者との触れ合いを……恐らく趣味としている。

「和紗さん……」

今朝初対面の挨拶を交わしたばかりの相手。その相手の大切なアナルを玩具扱いするなんて。

「奥様、どうぞお使いください」

「……はい……」

室内にいる蒲生、大樹、香澄、康生、そして本人の和紗までがそう言うのなら——やらなければならぬのだろう。

「さあ、ミキ、ゆつくりでいい」

背中に手を添えてくれていた蒲生が一步離れた。途端、大樹が腕を伸ばしコンドームのゼリーで微かに濡れたペニスを持つ。

「あ、大樹さん」

「怖くありません」

大樹の手によって、ペニスは和紗のアナルに導かれた。初めての挿入に、鼓動が高鳴る。

(セックス……しちゃう……)

でもオナニーだ、とみんなは言う。これはセックスではなくオナホールを使ったオナニーだと。

「あつ……」

亀頭がアナルに触れた。それだけでアナルがひくついたので分かり、ペニスがさらに硬くなる。

(もうおちんちん痛いっ……！)

早くイきたい。でも乱暴にするわけにはいかないし、何より戸惑いなくアナルを使ったと思われたくなくて。必死に深呼吸を繰り返し、大樹の手に押されるがまま腰をゆつくりと進める。

「お上手です、奥様」

「あつ、あつ」

初めて知ったアナルは驚くほど柔らかくとろけており、そして熱かった。

前編約5万6千文字です。  
宜しくお願いいたします。

gooneone

戸惑いの花嫁2 —前編—サンプル

gooneone (一むんむん)

2020/9/6

メール: gooneonegooneone@gmail.com

pixiv : 19591291

Twitter: @gooneone11

LINE: gooneone

